

音楽科教科論

音楽部

1 教科等の本質

音楽科の目標は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、(音楽文化)と豊かに関わる資質・能力を育成することである。幅広い活動とは、表現・鑑賞の2分野と、4領域【歌唱・鑑賞・器楽・創作】を示しており、これらが偏ることなく行われている状態である。中でも音楽的な見方・考え方を働かせるためには、音楽を形づくっている要素を理解し、知覚したことと感受したことを関連付けながら音楽を聴いたり演奏したりすることが重要である。

音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や(社会、伝統や)文化などと関連付けること」と学習指導要領に示されている。志民氏が、「現行の学習指導要領では、キャリア教育の充実が改訂の要点にもなっていることから、音楽科で言うならば『なりたい自分になるために音楽をどう生かすことができるか』『音楽の授業で学んだことを生活や社会にどう生かすことができるか』といった意識をもてるようにすると考えることができる」としている。音楽における教科の本質は、豊かな情操を培うことである。音楽を形づくっている要素を知覚するだけでなく、自己のイメージや感情と結び付け、表現することで、知覚と感受が連動されていく。子どもたちが将来的に学習してきたことを、主体的に生活や社会の中で生かしていこうと思える生徒を育成することで豊かな情操を育んでいきたい。

そのために、自分が、または自分たちがどのように表現したいか、主体的に考えて試行錯誤する授業を展開したい。試行錯誤する過程において、「このように表現したい」という、思いや意図が生まれ、表現したいことが明確になるだろう。音楽科における言語活動は、表現したい根拠を共有したり意見交換したりするにとどまらず、実際に歌ってみる、演奏してみる、鑑賞であれば何回も聴くという活動が活発であればあるほど、新たな発見をしたり理想の表現に近付けたりすることができる。その過程で、仲間の多様な表現方法や、様々な感性に出会うことが期待されるだろう。互いに、表現したい音楽について語ったり表現し合ったりする活動のなかで、豊かな感性は培われていくことが考えられる。※()は中学校のみ

2 音楽科での四つの学習活動

音楽科では、四つの学習活動を整理したものが以下の表である。

【前期課程】

ためし	○課題に対して、様々な表現方法を試している姿 ・歌唱…声の出し方や歌い方を話し合いながら、部分ごとやパートごとに分けて試している ・器楽…音の組合せや、使う楽器を変えて、曲のイメージに合うように試している ・創作…イメージに近づけるために、リズムや楽器の組合せなどを変えて試している ・鑑賞…旋律やリズム、強弱などに着目しながら聴こうとしている
みがき	○新たな知識や技能を習得することと、これまでに習得した知識や技能を活用し、表現を工夫する姿 ・歌唱…曲想と歌詞の内容との関わりについて理解し、曲想に合った歌い方を工夫している ・器楽…楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりを理解し、演奏の仕方や楽器の組合せなどを工夫している ・創作…曲のイメージに合うように新しい工夫をしている ・鑑賞…曲のよさをもっと知るために、音楽の特徴とイメージとを関連させながら聴こうとしている

さぐり	○これまでに学んだことを活動に生かそうとする姿 ・歌唱…これまで学んだ発声や表現の工夫を様々なジャンルの曲でも使っている ・器楽…合奏やアンサンブルで身に付けた音の重ね方や奏法を、他の曲の演奏にも生かしている ・創作…歌唱や器楽などで学んだ表現方法を自分の作品に生かしている ・鑑賞…鑑賞の学習を通して得た感性や表現方法を、他の領域の学習でも生かそうとしている
つなぎ	○自分の表現をよりよくしている姿 ・歌唱…友達や他のパートの歌い方を聞いて、新たな表現方法に気づき、自分たちの歌い方に取り入れている ・器楽…友達の演奏から、音の出し方や強弱などに気づき、自分たちの演奏に取り入れている ・創作…友達の作品の工夫に気づき、自分の曲に取り入れている ・鑑賞…友達の感想を聞いて、音楽の見方・感じ方を広げようとしている

【後期課程】

ためし	○よりよい表現方法について、試行錯誤している姿 ・歌唱…曲に合った身体の使用方や、発声方法などを吟味している ・器楽…曲にふさわしい音色や奏法について考えて表現しようとしている ・創作…リズム・旋律・和音について自分が表現したいイメージに合っているか、全体の構成を考えている。 ・鑑賞…どの要素に着目しながらか、音楽を形づくっている要素について様々な視点から鑑賞しようとしている。
みがき	○試行錯誤の場面で必要な知識や技能を積極的に身につけようとし、表現したいことを客観的に見たり聴いたりしながら個人や協働的な学びをしている姿 ・歌唱…表現したいイメージに近づけられているか、相互鑑賞したり資料を活用したりしながら理想の表現に向けて学びをすすめる ・器楽…曲想にふさわしい演奏方法になっていくか、相互鑑賞したり、資料を活用したりしながら、最初の自分とイメージを進める ・創作…作品を見直し、最初自分とイメージと照らし合わせて、再度調整 ・鑑賞…曲の背景をふまえて、何度も鑑賞することで自分がどの要素に着目しながらか確認し、曲全体の良さを味わおうとしている
さぐり	○学んだことを他の学習やこれから自分の生き方に生かそうとする姿 ・歌唱…日本歌謡や民謡など、鼻濁音でふきかきながら、教師の指示がなくとも自然に歌えたり、曲の長さやリズムなど、曲の要素について身につけた技術や知識を他の曲でも生かそうとする。 ・器楽…身に付けた技術や、曲の長さやリズムなど、曲の要素について身につけた技術や知識を他の曲でも生かそうとする。 ・創作…この作品を鑑賞する中で、表現の幅が広がっていくか、個人の技能を仲間と協力して表現する。 ・鑑賞…この作品を鑑賞する中で、表現の幅が広がっていくか、個人の技能を仲間と協力して表現する。
つなぎ	○仲間の学びから、自分の学びを調整している姿 ・歌唱…仲間の歌唱から、新たな課題や視点に気づき、それらをふまえて新しい表現方法に挑戦する ・器楽…自分の演奏や合奏に近づけるためには、表現記号、アーティキュレーション、強弱などさまざまな要素から技術を磨いていく必要があると感じている ・創作…相互鑑賞することで、自分の思いを表現し、仲間の作品から、新たな視点や仲間の感性を認められるようにする ・鑑賞…仲間はどのように聴き取っているのかを感じ取っているのかを共有することで、曲の新たな魅力に気づき、鑑賞の視点を変えて聴いてみようとする。

3 引用・参考文献

志民一成（2023）「我が国におけるウェルビーイングと音楽科教育をどう考えるか」『音楽教育実践ジャーナル』

文部科学省（平成 29 年告示）『中学校学習指導要領解説 音楽編』